

ゆうあい報 おだぴたる



社会医療法人

祐愛会織田病院 ODA REGIONAL MEDICAL CENTER

発行者 祐愛会織田病院企画室

責任者 織田 正道

DXで変わる仕事とキャリア

理事長 織田 正道

2030年に向けて、生成AIをはじめとするテクノロジーは、驚異的なスピードで進歩しています。こうした中、テクノロジーを活用して業務を抜本的に見直し、職員の役割やキャリアを再設計することが急務です。特に大きな変化が予想されるのは、記録、入力、文書作成など、日常的に行われている定型業務です。その影響は、医事職をはじめ、看護師、薬剤師、検査技師、放射線技師、リハビリ職など、ほぼすべての職種に及びます。生成AIやRPA、各種センサーの活用によって、これからの業務内容が大きく変わることは間違いありません。これまで定型業務に費やしていた時間を、患者さんとの対話や退院支援、多職種協働、専門的な判断など、「人にしかできない仕事」へ振り向けることが重要です。そのためには、「決められた作業を正確にこなす人」から、「データを活用して課題を見つけ、業務を改善する人」へのキャリアチェンジを進めなければなりません。

2030年までに最も急いで取り組むべきことは、院内でDXを推進できる人材の計画的な育成です。現在、全日本病院協会主催の「医療DX人材育成プログラム」の受講者は、法人全体で20名を超えました。受講修了者には、医療現場への理解を生かし、現場の課題とデジタル技術を結びつける「橋

渡し人材」としての役割を担ってまいります。さらに、法人内の各施設・各部門から意欲のある職員をDX推進委員に選び、勤務時間内に業務改善プロジェクトへ参加できる環境を整えることも大切です。2030年までには、すべての職員が生成AIの基本的な使い方に加え、情報セキュリティや個人情報保護について学び、AIが生み出す誤りやズレを見抜く力を身につける必要があります。その上でDX推進委員には、業務の流れの可視化やデータ分析、導入効果の測定などを学んでもらいます。高度な専門性を必要とする領域では、外部の専門人材とも連携します。「全職員」「DX推進委員」「外部専門人材」という三層の体制を築き、法人全体でDXを推進していく考えです。

2030年まで、残された時間はわずか4年です。私たちが目指すのは、単に新しい機器やシステムを導入することではありません。テクノロジーの活用によって職員の役割を高め、一人ひとりの成長と処遇の向上につながる新たなキャリアをつくることです。病院DXによって職員の負担を軽減し、患者さんに寄り添うことや専門的な判断など、「人にしかできない医療」に集中できる職場をつくる。その実現に向け、組織全体の変革を進めていきます。

2030年 医療DXビジョン：職員の役割とキャリアの再設計

DXによる業務効率化と、人間中心の医療へシフトするための戦略を周知する。

業務とキャリアの劇的な転換

定型業務の自動化と効率化

「人にしかできない医療」への集中

課題解決型人材へのキャリアチェンジ





「みがく」をテーマに、地域と共に歩む医療の未来へ

祐愛会織田病院 院長 織田 良正

おだびたるをご覧の皆様、いつも大変お世話になっております。7月1日付で祐愛会織田病院の院長に就任いたしました織田良正です。誌面をお借りしてご挨拶させていただきます。今年5月に伊山副理事長が鹿島・藤津地区医師会会長に就任され、地域の医療体制が新たな一歩を踏み出す中、私自身もこの激動の時代における責任の重さを肅々と受け止めております。

私が院長となってからも、織田病院が目指す方向性は歴代の院長が築き上げてこられた思いと変わるものではありません。それは、急性期から在宅までを包括し、地域の方が住み慣れた場所で自分らしく最後まで過ごすことができる「Aging in Place」の実現であり、保健・医療・介護が一体となった「総合ヘルスケアシステム」の強固な構築です。その上で、歴代院長の思いを受け継ぎ、さらに「織田病院がよりよい組織に」なるように、新院長としてのテーマに「MIGAKU（ミガク）」を掲げます。

少子高齢化や働き方改革、生成AIをはじめとする技術革新など、医療を取り巻く環境は大きな転換点を迎えています。変化の激しい時代だからこそ、私たちは現状維持にとどまるのではなく、自らを、そして組織をアップデート

し続けなければなりません。あえて「MIGAKU（ミガク）」としたのは、例えば、能力を磨くという意味や、神経を研ぎ澄ますという意味など色々な意味を込めることができるようにするためです。「ミガク」対象は、どのようなことでも構いません。所属している部署をよりよくするために業務の仕組みや連携のあり方をみがく。プロフェッショナルとしての知識や技術など自分自身をみがく。あるいは、職場の掃除や整理整頓でモノをみがく。スタッフ一人ひとりが「ミガク」ものを見つけ徹底して取り組むことが、組織全体の質を向上させ、地域貢献へとつながり、そして間違いなく自分自身をきつと助けることになります。

かつて鹿島市出身の日本青年団の父、田澤義鋪先生は「平凡道を非凡に歩め」と説かれました。当たり前のことを疎かにせず、情熱と覚悟を持って徹底的に取り組み、みがき上げていくこと。その積み重ねが私たちの価値を創出します。まだまだ若輩者ではございますが、地域のニーズに応え、期待される役割を全うできるよう、全力を尽くす所存です。今後とも変わらぬご指導とご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

松尾小児神経発達研究所の紹介

松尾小児神経発達研究所 所長 松尾 宗明

少子化のなかで子どもたちの健全な成長発達を支援し見守っていくことの重要性はますます高まっています。子どもたちの心と体の健康を守っていくには、子どもだけを見ていてもだめで、家庭や保育施設、学校など地域社会との関係性の中でとらえていくことが大切です。子どもたちの周りの環境は複雑さを増しており、片親、ステップファミリー、親の病気、貧困、家庭内の不和など、家庭の状況だけでも様々で、加えて学校など集団生活場面での人間関係など、外から見えないところに多様な問題やトラウマを抱えた子どもたちが数多く存在します。本研究所は、子どもたちの成長発達に大きな影響を及ぼす発達障害、希少難病の医学的な原因究明と治療法の探索、および医療と教育、福祉との連携強化による多職種での子どもと家族の支援体制の確立を目指して設立されました。

主な活動

1. 発達障害（神経発達症）の診療

地域での5歳児健診のネットワーク構築、教育機関、療育機関との連携強化を目指して活動していきます

2. 不登校、心身症の診療

身体症状に対するアプローチとともに、その背後に存在する心理社会的な要因の存在を意識した診療が大切です。

つまり、子どもの呈している症状が、何らかのトラウマ（こころの傷）の結果として表れているものかもしれない、という想像力をもって対応するということで、トラウマインフォームドケアと呼ばれます。いろいろな立場からの多様な視点に立脚したバイオサイコソーシャルな診療を目指します。

3. 自閉スペクトラム症（ASD）の増加要因についての研究

ASDは、脳内の神経ネットワークの異常（偏り）に基づく情報処理の問題が本態だと考えられていますが、その原因は様々で遺伝的な要因が大きいとされています。しかしながら、近年のASDの増加の要因は遺伝的要因のみでは説明不能で、食生活などの環境因子が何らかの影響を及ぼしている可能性があります。私たちのグループでは、腸内細菌叢の変化との関連性などに注目し研究を進めています。

4. 地域での小児救急医療体制についての研究

少子化に伴い地方での夜間救急の病院へのアクセスへの問題が顕在化しています。行政機関と連携しながら状況を解析し、小児のけいれん重積などに対しプレホスピタルケアを含めた早期の対応が可能となるような体制づくりを目指しています。

5. 小児の希少難治疾患研究

佐賀大学をはじめ多機関と連携して、疾患特異的iPS細胞を用いた希少難治疾患の病態解析研究や新規治療法開発を行っています。



足まる外来開設にあたって

ようこクリニック 院長 織田 洋子

ようこクリニックでは、令和8年4月より「足まる外来」を開設いたしました。

「足まる」の名称には、足を丸ごと診るという意味と、足を健やかな状態に保つという願いを込めています。また、地域の皆さまに親しみを持っていただけるよう、鹿島市のマスコットキャラクター「かし丸」を連想する名前としました。

高齢社会を迎えた現在、足と爪のケアは生活の質を維持し、健康寿命を延ばすために欠かせない医療の一つです。しかし、高齢になるにつれて自分で爪を切ることが難しくなり、厚い爪や変形爪、巻き爪、タコ（胼胝）、ウオノメ（鶏眼）などの足のトラブルが増えてきます。また、足白癬（みずむし）や爪白癬が見逃され、感染の原因となることも少なくありません。

足まる外来では、足の洗浄による清潔保持を基本とし、医療的な爪切り、タコ・ウオノメの処置を行うとともに、足白癬・爪白癬の早期発見と適切な治療に努めます。足を清潔に保つことは感染予防の第一歩であり、皮膚の健康を守るうえでも大切なことです。

また、本外来は処置のみを目的とするものではありません。ご本人はもちろん、ご家族や介護施設職員、病院スタッフの皆さまに対して、足と皮膚の清潔保持の重要性や日常的なケア方法についてお伝えし、地域全体でフットケアに取り組むことを目指しています。

私たちは、「足をきれいにすることは、その人らしい生活と尊厳を守ることである」と考えています。

対象は地域のご高齢者の皆さまです。なお、リクライニングや車椅子

をご利用の方につきましては、待ち時間なく診療を受けていただくため、特別予約制としております。

地域の皆さまの健やかな歩みを支えるため、お気軽にご相談ください。



第7期生看護師特定行為研修 修了式を執り行いました

令和8年3月30日（月）に第7期生看護師特定行為研修修了式を執り行いました。

第7期生は、織田病院より1名とケアコートゆうあいより1名、高島病院より1名の計3名が受講し、在宅・慢性期領域の研修を修了いたしました。



訪問看護ステーション
田中 瑞稀

特定行為研修修了後は、創傷管理の特定行為を実践し、患者様の状態に応じた処置やケアに役立てています。今後も研修で得た知識と技術を活かし、安心して在宅で療養生活を送れるよう支援していきたいと思えます。



ケアコートゆうあい
志田 涼二

特定行為研修で学んだ知識を、創傷管理や脱水評価の場面で実践しています。観察の視点が広がり、早期発見の重要性を実感しています。今後も学びを深めながら、より良いケアに提供できるよう取り組んでいきます。



高島病院
石橋 千春

仕事との両立に不安もありましたが、先輩の姿に刺激を受け受講しました。臨床推論やフィジカルアセスメントを学び、視野が広がりました。大変な時期もありましたが、励ましあった同期の存在は大きかったです。今後は、得た知識、技術を活かしより質の高い看護を実践していきたいです。



初期臨床研修医 体験記

太田 亮輔

織田病院初期研修医1年目の太田亮輔と申します。織田病院で初期研修を開始してから、3か月弱が経過しました。

最初の2か月間は総合診療科で研修を行い、現在は循環器外科で研修を行っております。研修開始当初は解らないことばかりで電子カルテの使い方や診療・入院の流れなど、基本的な業務を学ぶところからスタートしました。慣れない環境の中で不安もありましたが、指導医の先生方だけでなく、看護師、薬剤師、リハビリスタッフ、臨床検査技師、放射線技師、医療ソーシャルワーカーや事務の方など、多職種の皆さんに温かく支えていただきながら、日々研修に励んでいます。

実際に働いてみて感じた織田病院の魅力は職種間の垣根が低く、気軽に相談しやすい環境が整っていることです。疑問に思ったことをすぐに相談できる雰囲気があり、患者さんにより良い医療を提供するために、スタッフ全員が同じ方向を向いていることを実感しています。

また、織田病院では初期研修医であっても早い段階から主治医として患者さんに関わる機会をいただいています。私自身も4月後半から主治医として診療に携わり、患者さんやご家族と向き合う中で、多職種連携の重要性を身をもって学んでいます。

入院中の患者さんの様子について看護師やリハビリス

タッフの方々から情報を共有していただき、退院後の生活については医療ソーシャルワーカーの方に相談するなど、多くの職種の皆さんの力を借りながら診療を行っております。

また、仕事終わりには病院のフットサルにも参加しており、業務外でもスタッフの皆さんと交流を深めることができています。こうした温かい雰囲気も、織田病院の大きな魅力の一つだと感じています。

まだまだ至らぬ点も多く、ご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、一つひとつの経験を大切にしながら、成長していきたいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



末田 蓮太郎

初期研修医1年目の末田蓮太郎と申します。織田病院での基幹型研修の2期生になります。医師として働き始めてから早くも3か月目となりましたが、毎日新鮮な経験をすることができており、あっという間に過ぎていったように感じています。

これまでの研修で私にとって大きな挑戦となったのは、1年目の4月からすぐに主治医として病棟管理に深く関わらせていただいたことです。

実際に主治医という立場で患者様と向き合うことは、入職前の想像以上に考えることが多く大変なものでした。学生の頃には意識が及んでいなかったような細かな業務に加え、自分の判断が治療に繋がることに責任を感じることも多く、実力不足を感じる毎日でした。

なかでも特に葛藤を覚えたのは、現場経験の浅い1年目の私が、自分よりもはるかに豊富な経験を持つコメディカルの方々に「指示」を出さなければならないという立場にあることです。心苦しく感じることもあり、現場を分かっていないことを申し訳なく思っておりましたが、コメディカルの方から実務に沿ったアドバイスをさりげなく教えてくださることも多く、そのお心遣いとサポートにいつも助けられていました。

こうした当院の非常に恵まれた環境のおかげで、毎日

一歩ずつ着実に成長できていると感じております。指導医の先生方は忙しいにも関わらず、私の拙い疑問やアセスメントに熱心に耳を傾け、どんな質問にも真面目から向き合ってくださいます。コメディカルの皆様とも気軽に相談ができ、病院全体で温かく育てていただけていることを実感しています。

まだまだ日々の業務に必死な状態ではございますが、この素晴らしい環境で研修をさせていただけることに心から感謝しております。これからも初心を忘れることなく経験を積み重ね、患者様やスタッフの皆様から信頼される医師になれるよう、努力していきたいと思います。



新任医師紹介



外科

いけだ しょうた

池田 翔大

本年度4月より当院外科に着任しました池田翔大と申します。外科治療だけでなく、患者様やご家族様の不安にも寄り添える医療を目指しております。地域の医療機関の皆様と協力し、より良い医療提供に尽力します。今後ともよろしくお願い申し上げます。



消化器内科

むとう じゅん

武藤 潤

消化器内科の武藤と申します。皆様に寄り添う医療を実現できるよう尽力いたします。お気軽にご相談ください。よろしくお願いいたします。



総合診療科

はなだ たかし

花田 高史

今年度より赴任となりました、医師5年目の花田と申します。昨年までは佐賀大学医学部附属病院の総合診療部として勤務していました。微力ではございますが、地域医療に貢献できるよう努めて参りますので、よろしくお願いいたします。



耳鼻咽喉科

もうり ようすけ

毛利 陽介

今年度より織田病院で勤務させていただきましたことになりました耳鼻咽喉科の毛利陽介と申します。

まだまだ至らない点も多いですが、患者様のお話をしっかり伺い、安心して受診していただけるよう丁寧な診療を心掛けてまいります。

みみ・はな・のどについて気になることがあれば何でもお気軽にご相談ください。

地域の皆様のお役に立てるよう精一杯頑張ります。どうぞよろしくお願いいたします。



総合診療科

おおいし とおる

大石 透

令和8年度より織田病院に総合診療医として赴任となりました。

院内の各スタッフはもちろんのこと、地域の先生方にもお力添えを頂きながら、佐賀県南部医療圏の地域に名指した医療に少しでも貢献できるよう精進してまいります。

皆様のご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします。



皮膚科

いの

井野 ちおり

皮膚科の井野ちおりです。

地域の皆様に貢献できるよう頑張りますので、どうぞよろしくお願いいたします。



研修医

おおた りょうすけ

太田 亮輔

臨床研修医1年目の太田亮輔と申します。地元は北鹿島出身で大学は佐賀大学出身です。

地域の方々に信頼される医師を目指して研鑽を積んでいこうと思います。

ご迷惑をおかけすることも多いと思いますが、ご指導よろしくお願いいたします。



研修医

すえだ れんたろう

末田 蓮太郎

今年度からお世話になります、臨床研修医1年目の末田蓮太郎と申します。福岡市早良区出身で、大学は佐賀大学を卒業しております。医師としても社会人としても未熟で色々ご迷惑をおかけしてしまうことも多いと思いますが、一日でも早く病院の戦力になれるよう努力して参ります。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

よろしくお願いします。
致します。



Introducing our new staff

新入職員紹介

織田病院



松本 海空
3階西病棟
看護師



峰松 夏望
3階西病棟
看護師



片瀨 日向
3階西病棟
看護学生



坂井 優梨奈
3階西病棟
看護学生



馬場 愛佳
3階西病棟
看護学生



森 遥菜
3階東病棟
看護学生



中尾 愛
4階病棟
看護師



西島 菜緒
4階病棟
看護師



小池 雅姫
4階病棟
看護学生



田中 美羽
4階病棟
看護学生



渡瀬 玖怜亜
4階病棟
看護学生



吉松 晴美
看護部長室
看護師



小川 教子
臨床研修センター
事務



小森 ゆかり
事務管理部
事務



原 舞華
医療秘書科
事務



洲上 聖愛
医事課
事務



松尾 茜
医事課
事務



山本 結菜
栄養食事サービス部
調理師



菊池 彩美
リハビリテーション科
理学療法士



杉原 拓実
リハビリテーション科
理学療法士



富岡 蕾
リハビリテーション科
理学療法士

ゆうあいビレッジ



辻 真穂
機能訓練室
作業療法士



岡 博子
通所リハビリテーション
看護師



朝永 夏希
1階療養棟
介護福祉士



古舘 蓮
診療支援部放射線科
放射線技師



山口 凌平
診療支援部放射線科
放射線技師



ケッ ケッ ワイン
2階療養棟
介護職



テイン モエ トウ
1階療養棟
介護職

高島病院



小森 愛華
4階病棟
看護学生

清涼荘



田浦 天華
3階療養棟
介護職

「一人じゃない」安心感が、ここでがんばる力になる ～若手職員を支える階層別フォローアップ～

人材育成室 係長 牛島 久美子

祐愛会では、入職後の不安に寄り添う1年目職員のフォローアップ研修や、視野が広がる2・3年目の交流会を開催しています。一番の目的は、部署や職種を超えて「一人じゃない」と実感できる、温かい繋がりのお台づくりです。年次ごとに訪れる悩みや壁。だからこそ同期と共有し、お互いに耳を傾け、肩の力を抜いて繋がれるこの機会を大切にしています。みんなに支えられ、安心して次の一步を踏み出せる「互いを温かく包み込む文化」こそ祐愛会の強みです。これからも一人ひとりに寄り添い、みんなで応援し続けます。



【参加者の声】

〇1年目職員フォローアップ研修

今回の研修をきっかけに、自分の3年後の姿を具体的にイメージすることができました。今後は分からないことをそのままにせず積極的に学び、少しでも早く職場に貢献できるよう努力していきたいと思います。

(織田病院医事課 瀧上 聖愛)



〇3年目職員交流会

このたびは3年目交流会を開催していただき、ありがとうございました。理事長や伊山院長、洋子先生と意見交換をしたり、各部署で活躍し後輩指導に励む同期の姿に刺激を受ける良い機会となりました。私自身もさらに成長できるよう努力していきたいと思います。

(ゆうあい機能訓練室 田中 愛深)



【令和8年熊本地震】被災地へ医療支援班(AMAT・JMAT)を派遣

当院では被災地支援のため、全日本病院医療支援班(AMAT)および日本医師会災害医療チーム(JMAT)として、甚大な被害を受けた熊本県宇城市へ医療スタッフ(医師・看護師・理学療法士・事務の4名)を派遣しました。

AMAT隊(7/31~8/2)は熊本リハビリテーション病院へ飲料水180本を運搬後、宇城総合病院の救急外来診療を支援しました。2日間(日勤帯)で32件対応し、片付け中のガラス切創などの震災関連創傷や、猛暑による熱中症・脱水症状などの治療にあたりました。

JMAT隊は(8/7~8/10)、熊本市内を拠点に宇城市周辺で活動しました。断水が続く地域の医院や避難所へ水・段ボールベッド等の物資を搬送したほか、宇城本部での情報管理や施設でのバイタル測定等を実施しました。



健康講話

健康管理センター 田中 寛子

健康管理センターでは、法人の基本方針「Aging in Place ~住み慣れた地域で自分らしく、最後まで~」のもと、地域の皆さまの健康寿命を延ばし、安心して暮らしていただける地域づくりを目指して活動しています。

その取り組みの一つとして、公民館や企業などで健康講話を行っています。病気の予防や早期発見、生活習慣病予防、介護予防など身近な話題について、理学療法士、保健師などの専門職が、正しい知識をわかりやすく紹介しています。また、当院は佐賀大学地域総合診療センターとしての役割を担っており、総合診療部の医師による専門的な講話を開催することで、幅広い医療情報を提供しています。

講話では、簡単な運動や頭の体操などを取り入れ、参加された方が楽しみながら健康について学んでいただけるよう工夫しています。講話後には、血圧測定や健康相談を受ける時間を設けています。病院に来る前の段階で、地域の方が自分の健康状態に気づき、生活習慣の改善や早期受診につながるきっかけになればと考えています。今後も、医療の専門職が定期的に訪れることで、困ったら相談できると人がいるという安心感につなげていきたいと思っています。これからも地域の皆さまに寄り添い、地域全体の健康増進に貢献してまいります。



「健康経営優良法人2026」に認定されました。

健康経営優良法人制度とは経産省が地域の健康課題に即した取り組みや日本健康会議が進める健康増進の取り組みをもとに、特に優良な健康経営を実践している法人を顕彰する制度です。

社会医療法人 祐愛会は2026年3月11日付けで「健康経営優良法人2026」(大規模法人部門)の認定を受けました。

祐愛会グループ
健康経営への
取り組みはこちら▶

